

荻原新八郎 著

呼吸理学療法学

(B 5 判 278 頁 4,635 円 (税込) 1990 年 医学書院 刊)

和才 嘉昭

(九州リハビリテーション大学校理学療学科)

最近では呼吸器系に関係した書籍が洋書の翻訳物を皮切りに、和書でもかなりの数出回っている。リハビリテーション医学の一分野であり、特に最近のように高齢化社会の台頭に拍車をかけられ、呼吸器系疾患の理論と実践を系統立てて学ぶ必要を迫られた諸氏にとっては、それらの書はいずれもその構成と内容に何がしかの偏りと物足りなさを感じていたのではなかろうか。

まずこの書はタイトルに注目されると明白のように、呼吸器系の正常機能と病態様相をベースに評価と訓練と管理を網羅し、呼吸器疾患の理論と実践を学ぶ「呼吸理学療法学」にふさわしい、いわゆる学問として成立できた良書と思われる。

「序」でも触れているように、高価な訓練機器へ偏位した運動機能面一辺倒の現在の理学療法から脱皮し、生理維持面としての心肺機能への対応の肝要性を、治療の基本である徒手技法で十分に行

えると説き、証明している。

次にこの書の目次構成について見ると、まず 1：呼吸器疾患患者の評価、2：呼吸理学療法的手段、3：術前・術後の理学療法、4：呼吸器疾患のいくつか、5：閉塞性換気障害、6：拘束性換気障害、7：集中監視治療と 7 項目より成っている。

また内容は 1 では形態的、機能的、生理化学的、それも静、動両者からそれぞれ用手的に評価する患者把握法と、そこからの呼吸理学療法への立案や患者反応までを詳細に説いている。2 では実践手法の数々、特に気道浄化法、運動負荷法、省エネルギー法、加えて補助療法、さらに患者や家族教育の必要性から心理社会面に至る詳細が含まれている。3 では胸部外科手術前後の対応を、麻酔や手術侵害さらに安静の功罪を含めて説いている。4 では遭遇する 9 つの呼吸器疾患、特に気管支喘息を中心に、それぞれの取り組み方法を病態特性より見た目的と手段で要

領よくまとめている。5 では閉塞性換気障害、6 では拘束性換気障害につき、それぞれ代表的疾患を中心とし、病態特徴、評価法、訓練法、チーム医療での専門職の役割、生活対応と留意点など必要項目について詳述している。最後の 7 は集中監視治療での理学療法についてであるが、以前では考えられない分野の職務領域であり、当然理学療法士の職務として活躍すべき内容、つまりは理学療法士としての取り組み方、対象となる疾患、人工呼吸法、機械呼吸法など成人から乳幼児に至る広域に及ぶ問題項目が網羅されている。

このような非常に広い分野が大変詳細に、簡明な図表を適材適所に駆使し、理学療法士である著者により、立派な成書として今回発表されたが、氏も感謝されているごとく、英国およびカナダの公認理学療法士でもあるサンドラ夫人の協力による、夫唱婦随により初めて完成されたものと信ずる。

この書の体裁は、色調と感触に温もりを感じ、大きさ、重さに手持ち、膝置き、机上の読書のいずれにも便利で、さらに内容から見れば価格は低廉と思われる。

理学療法士のみでなく高齢化社会の医療分野で働く人は職種を問わず、また自分自身の保健のためにも一読を勧めたい書である。